



SDGsに向けて 国際協力NGOの視点

加藤 良太

関西NGO協議会 提言専門委員
 ryotak@mac.com



SDGsの前身の一つとしての

ミレニアム開発目標(MDGs)

- 貧困・開発分野のマルチセクターの国際目標。2000～2015年の15カ年。
- 貧困・飢餓人口の半減など、1990年を基準年として、8つの目標、21のターゲット、60の指標の達成を企図。
- 多くの分野で一定の成果を収めたが、反面で地球規模課題の所在・構造の変化にも直面。

→SDGsへ



目標1

とてつもない貧困と飢えをなくそう



目標2

みんなが小学校に通えるようにしましょう



目標3

ジェンダーの平等を進めて女性の地位を向上させよう



目標4

子どもの死亡率を下げよう



目標5

女性が健康な状態で妊娠し、子どもを産めるようにしましょう



目標6

HIV/エイズ、マラリア、その他の病気が広がるのを防ごう



目標7

環境の持続可能性を確保しよう



目標8

世界の一員として、先進国「も」責任を果たそう



MDGsの特徴＝「途上国」がターゲット

主要国など
 「援助国」



「途上国」

援助政策へ反映

- ODAの増額・質の向上
- 政府・援助機関・NGO・(企業)などマルチセクターの援助の調和化(ハーモナイゼーション)。
- 援助効果→開発効果の向上。
etc...

開発協力・援助

国内政策へ反映





今回のおはなし

- MDGsの「中身」には微に細に触れない。
- むしろMDGsの「**実行→達成**」に向けて、開発に関わる各セクター間で**どんな課題・議論が提起されたか**をざっと紹介。
- そのことがSDGsの「**実行→達成**」、特に国内化に重要な示唆を含むと信じる。



初期の議論

- **政策・計画・事業への「量的」反映**
- 「ホワイトバンド」のキャンペーン
 - 
- 2005.9「国連サミット」
 - 
 - 小泉首相(当時)の発言



援助効果→開発効果

- 政策を量的に打っても、やり方がマズければ、効果は上がらない。
- 政策決定～実施の「質」の向上、各セクターの手段・取り組みの調和化・最適化(ハーモナイゼーション)などなど。
- 開発効果の測定・指標化。



政策環境・促進的環境 (Enabling Environment)

- 質の高い政策を打っても、効果が発現できる社会的環境がなければ、効果は出ない。
- **人権の実質化**、特に政治的自由・権利、政治参加の保障・多様性、言論・表現の自由、メディアへのパブリックアクセスetc...
- えっ、日本って「先進国」なの・・・？



身近で具体的に考えると・・・

- 国政・自治体選挙での一般市民・こどもの期間を制限されない自由な選挙活動。
- 政府・自治体政策における、対話・応答的な公聴会・パブリックコメントの実施。第三者的な異議申し立てメカニズムの設置。
- 放送・新聞等で市民が企画・発言でき、皆が視聴できる放送・記事枠の一定確保。



MDGsを経て・・・

- いくら政策的手段を費やそうと、効果が発現する社会的環境、特に「**人権の実質化**」がなければ開発目標は質的に達せられない。
- 貧困・格差など**地球規模課題の所在・構造が変化する**現在だからこそ、重要。
- さらに、いくつかの教訓・示唆が・・・

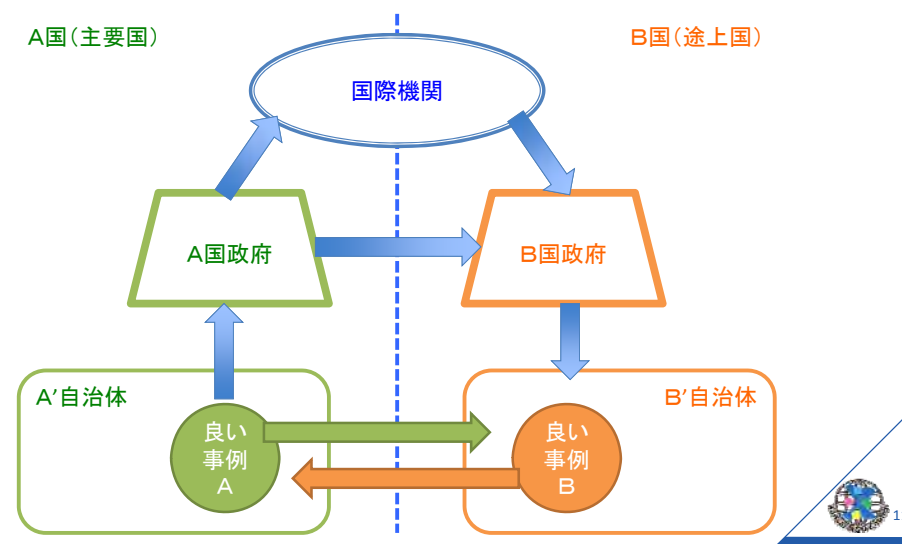


政策一貫性

- 地域～国家～国際間で、あるいは地域間や国家間で、政策一貫性が確保されなければ、地球規模課題に効果はない。
- 主要国では「国内政策」と「援助」「外交」「安保」間の政策ギャップが問題となる。
- 日本国内では自治体と国（政府）の政策ギャップが問題となる。



政策移転のあり方



地球規模課題のアンブレラ型 コンセンサス・意思決定の限界

- 「会議場」～「現場」の格差。
- 国家間だけでなく市民社会の間でも限界感が顕著に。
- 各セクターのグローバルエリートに限られた場所・期間で話し・決めることの限界。
- 「ポスト・リオ体制」を模索する時期か……



アンブレラ から ボトムダウン グローバル から グローカル

